

「まち」が変わる!? 自治基本条例⑪

政策企画課 224-5503

憲法に設けられた地方自治の一章。そこに定める「地方自治の本旨」の内容は、地方自治法などの法令を改正することにより、社会状況の変化などに応じた手当てがされています。そして地方分権が進んでいる現在、みんなで決めるという「住民自治」をどのように充実させ、まちづくりを進めていくかが各自治体の課題です。

そこでまず大切なことは、住民の皆さんと自治体が「より良いまちにしたい」とい

う思いを共有し、意見を出し合っていくことだと考えます。自治基本条例の制定に向けた取り組みも、こうした課題を法的側面からとらえようとするものといえます。

市は、課題への第一歩を踏み出したばかりです。皆さんに川越をより良いまちに変えていく力になっていただき、川越のまちがどのように変わっていくことが良いか、ともに考えていけるよう、今後も取り組みます。

BOOK NAVI

本の良さを再認識する

中央図書館

222-0559

日本では年間に約八万冊の本が出版されています。市立図書館で購入する本は、内容、著者、受賞などを考慮して選びま



「太陽電池のしくみがわかる実験と工作・事典」小林義行著＝太陽光エネルギーに関する入門書▶「天空の蜂」東野圭吾著＝犯人の要求は「すべての原発を停止しろ」。過去に書かれたものですが、今の日本を想定したかのような内容▶「母と子でみる世界のボランティア」鈴木真理子著＝国際赤十字や国境なき医師団の活動などを紹介

す。しかし、一週間で千五百冊前後発行される新刊書の全てに、目を通すことはとてもできません。選ぶための時間ももっと欲しい、と思いつつ毎日日本を扱っています。このようにして集められた膨大な蔵書の中から、毎月テーマを決めてお薦めしたい本を紹介するのが「特集展示」のコーナーです。「本棚に眠っている良書を利用者に知ってもらいたい」という図書館職員の想いが詰まった本ばかり。何年たっても色あせず、時には人生を変える力を持つ本の良さを再認識できる場所になっています。

今月は「震災から1年」というテーマで特集展示を作りました。地震・津波などの自然科学だけでなく、ボランティア、小説まで幅広く取りそろえました。ぜひ、「特集展示」コーナーにお立ち寄りください。

くらしの中の花と緑⑨

まちを彩る花を育てています!

環境政策課 224-5866

昨年5月、札の辻交差点のポケットパークにある市民花壇に色とりどりの花が植えられました。その花苗を育てたのは、県立川越総合高校の生徒たちです。同校では、草花の実習で春にはサルビアやマリーゴールド、ペチュニアなどを、秋から



芽が出たばかりのマリーゴールドを丁寧にポットに移します

冬にかけてはシクラメンなどを育てています。

温室で実習に取り組んでいた吉田沙霧さん(2年生)は、「一生懸命育てた花がきれいに咲いて、その花を見た人が喜ん

でくれるとうれいです」と笑顔で話してくれました。

指導に当たると須藤浩紀先生・島田司先生に話を伺うと「花の栽培技術を習得するために、苗からではなく種から育てています。4月には、実習で生産した花や野菜の苗、ジャムなどの加工品の即売会を学校で行うですよ」。

2月に芽が出たマリーゴールドは、春に向かってぐんぐん成長し、生徒たちの手から地域の皆さんの手へと受け継がれ、まちを彩ります。





市長 からの 手紙

②東日本大震災から1年

早いもので、昨年3月11日の東日本大震災から1年が経ちます。川越市でも関東大震災以来の烈しい揺れを経験し、鯨井地内の資源化センターの外壁や「つばき館」の天井に亀裂が入るなどの被害を受けました。これらは、東北地方の被害に比べれば軽微なもので、昨秋までにはすべて元どおりに修復できました。

今回の震災では、一時避難所の開設と運営など、市にとっても初めての経験が数多くありました。一方、被災地への人的支援、救援物資の受け入れと現地への搬送、義援金の受け入れなど、市民の皆様の暖かい、そして熱心なご協力により、多くの支援を実施することができました。

市では、今回の震災の経験を今後に生かすために、防災無線の難聴地域の解消のための取り組みや、防災計画の見直しを進めています。なかでも、大地震直後に通信網が不通になり、情報伝達が困難になったこと

から、その解決策として衛星携帯電話の導入等の対策を講じる予定です。

ところで、今回の震災は、その地震と津波による被害の甚大さだけでなく、福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染を伴っているということから、復興には極めて長い年月がかかることが予想されます。過去の深刻な事態もいつしか忘れ去られてしまうというのが世の常ですが、東日本大震災の被害に遭われた被災地の皆様や、原発事故を逃れて避難生活を送っている方たちへの支援は、長期間必要であると思います。

2月1日時点で277人の方が、市内で避難生活を送られています。市では基金をつくり、避難されている方や被災地のために、今後も支援を継続していく予定です。被災した自治体への職員の派遣は現在も行っています。また、民間レベルでもボランティア活動などで継続的に被災者・被災地支援を行っている方がいます。私の友人の医師は、キャンピングカーまで買い込んで被災地への医療支援に取り組んでいます。いろいろな形で市民の皆様による被災地支援が続いていることには、本当に頭の下がる思いです。

被災地の一日も早い復興と、避難されている皆様が一日も早く故郷に帰れることを心から願っています。

川越市長 川合善明

人権教育シリーズ

児童・生徒の人権作文 22

教育指導課 224・6114

平成22年度に市内の小中学生から募集した作文をまとめた人権文集「あけほの」から、作品を紹介します。

祖母と私③

中学三年

私のことを忘れないでいてくれたことも、昔と同じように話してくれたことも、その時、素直によかったと思うことができた。しかも、よかつたのはそれだけではない。話をしていくうちに祖母は、

「この前、テストでこんな点だったんでしょ。」
「やはり、その服は最近買ったものね。見たことないもの。」
と言った。私でも覚えていないことをたくさん覚えていてくれたのだ。私は、(おばあちゃんはこのなにしつかり私との思い出を心に刻んでいてくれたんだ。それなのに私は……)と今まで逃げ続けていた自分を恥ずかしく思った。私の方が祖母から離れようとしていた。その事実が私を後悔させたが、同時に(また、来よう。)という思いも生まれた。

「今日はおばあちゃんが、あなたのことを覚えていてくれてよかったね。」
と言ってくれた。もちろん私も、今日来て本当によかったと笑うことができた。

「老い」とは何だろうと時々思うことがある。楽しかった日々がすべて思い出に変わり、自分の見えている世界の広さや明るさを失うことかもしれない。私はそのように衰えていく祖母を疎んじていた。けれども、祖母は自分を呼ぶ私の小さな声に応えてくれた。そのことを実感して、初めて私も今、真に祖母と向き合うことができるようになった。もしも、これから先、祖母が私のことを見失ってしまったら、私はしつかりと声をかけ続けていきたい。

今度は、私が祖母に伝える番だ。

(終わり)

た。